

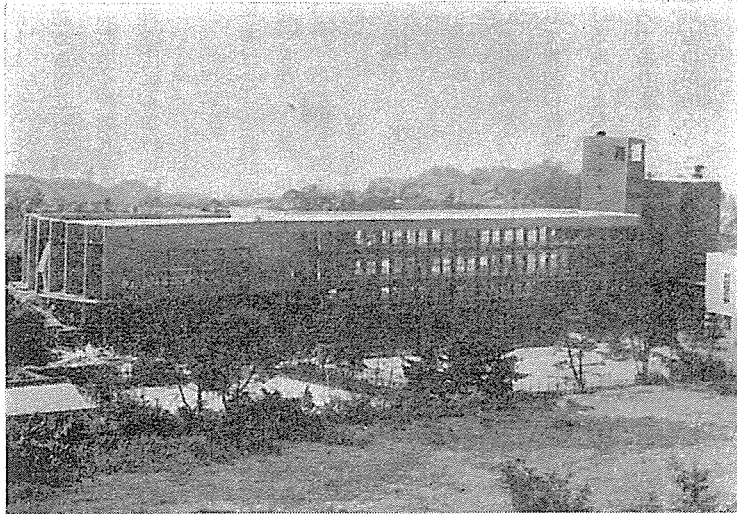
THE KANSAI UNIVERSITY BULLETIN

Osaka, Oct. 30th, 1957. No 308

# 關西大學學報

昭和32年10月 第308号

昭和二十六年十月十五日第三種郵便物認可  
昭和三十三年十月三十日発行（毎月一回三十日発行）  
通巻第三〇八号



秋陽浴びる第三学舎

關西大學學報局

本学千里山学舎の総工事の完成を記念して、本日に盛大なる式典が挙行されるにあたりまして、お祝を申し述べることができませんのはわたくしの深くよるこびとするところであります。

願ひまするに本学の前身である関西法律学校が関西における法律学校のさきがけとしてはじめて設立されたのは明治十九年のことであります。その当初



### 第三学舎落成式における

## 祝詞

文部大臣 松 永 東

は独立の校舎もなく寺院等を借用して授業が行われましたが、大阪控訴院を中心とする法曹界の有力者によつて創立されたこの学校は、発足のはじめからきわめて世評が高かつたと聞きます。その後、西区江戸堀に校舎が新築されて専門学校令による専門学校となり、ついで大正十一年大学令による大学に昇格し、大阪における最初の文科系大学としてこの千里山学舎の建設の第一歩が踏み出されたのでありま

した。それ以来躍進をつゞけて遂に現在のようない大学園にまで発展し、関西における私学界の重鎮として権威ある存在を誇つていたのでありまして、建学以来七十余年にわたつてうちたてた輝かしい業績はひとしく世の認めるところであります。さきの学制改革に際していち早く新制大学に移行し、雄大なる規模のもとに新時代にふさわしい学園の建設に努

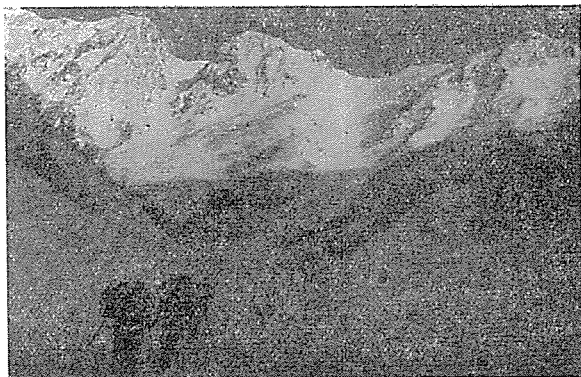
力してこられました。今や六カ年にわたる学舎建設の工事が完成して新装の偉容まつたく整い、本日の記念式をあげる運びとなりましたことは御同慶に堪えないところでありまして、関係者各位にはひとしお感慨の深いものがあることと推察いたす次第であります。

申すまでもなく、ことは一朝一夕にしてなるものではないません本学が今日の大をなすに至りまし

たについても、その間には時勢の推移につれて幾多の変遷があり、また容易ならぬ困難に遭遇したことも一再ではなかつたように承知いたしております。それにもかかわらず、それらの障害をことごとく突破して現在の隆盛をいたすことのできましたのは一に歴代の当事者各位の熱意と努力との結果にほかならないのでありまして、その多年にわたる御労苦に対し、この機会に深厚の敬意を表したいと存じます。

今や学術産業等各分野にわたつてめざましい革新が行われてあるとき、大学における研究及び教育に對して世の期待するところはすこぶる大きいのであります。かかる際に本学が新装の学舎に充実した機構を整え、校運のますます盛んなるを見ますことは実に心強い限りと存じます。わたくしは本日の記念式にあたり、本学の繁栄を心からお祝い申しますとともに教職員各位及び学生諸君がますます学園の團結をかたくして、権威ある学風の発揚につとめられ、もつて本学の使命を達成されるよう希望してやまない次第であります。

昭和三十三年十月十七日



未明の出発

昭和三十三年三月六日～四月九日

## 雪の前穂高から白馬まで

——積雪期北アルプス全山逆縦走——

濱田 啓 司

外では木枯しが吹いている。窓の隙間からは遠慮なしに冷い風が入つて来る。学期末試験の始まつた体育館は、ひっそり静まり返っているのに、ここ山岳部の部屋は時ならぬ騒ぎが毎日遅くまで続いている。

テント、ロープ、梱包用の藪や縄等夥しい荷が山の様に積み重ねられた中で、リーダー会議が開かれている。出発の時期は目前に迫つて来た。細心の注意をはらい、周到な計画を実行するのだ。縦走隊と各補給隊との計画の打合せや、食糧、燃料、医薬、気象、そして資金繰り、と夥しい準備、事務、雑用が試験の最中にでも、どんどん片づけられて行く。

学校からは異例の多額の援助金が出た。教育後援会からも激励の言葉と共に援助金がとどけられた。先輩からは毎日の様に種々の援助が与えられる。総ての方々の好意で、僕達の計画は着々と軌道

の上に乘せられた。学期末の試験が終ると部屋は堰を切つた様に、どつと戦場と化した。夥しい装備の山の中から各パーティに必要な品物が次々ととり出され荷造りされて行く。

藪、縄、パッキングケース、ワラ屑等が部屋からはみ出して廊下まで散つている。それぞれの目的地に送るため、日通のトラックが幾度か出入りしてこの騒ぎは終りを告げた。だけど僕達はもう一度食糧の梱包に、この数倍の大騒ぎを繰り返さねばならなかつた。

### 雪の国へ

発車のベルが鳴る。田淵先輩をはじめ多数の見送りを受けて汽車は大阪を離れる。やがて得意の四等寝台におさまつて、

あれからもう半年の歳月が流れた。北アルプスの山波は又新しい雪におほわれていた。僕達の夢だつた北アルプスの全山逆縦走の小さな出来事はもう昔の事の様に忘れ去られたが、僕達が極度の忍耐と努力の内に見出した大切な「自由と真実、そして人の和」は昨日の出来事の様に僕達の心の中に生きている。この縦走を通じて得た宝物は永遠に失なわれる事は無い。美しい大自然の舞台で思う存分、手足をのばして青春を過ごした僕達は幸福感で胸が一杯だ。

### 出発の準備

一九五七年春積雪期  
アルプス全山縦走隊メンバー

縦走隊	隊長、チーフリーダー	濱田 啓 司
隊員	法3	商3 柳川 哲夫
	經2	槍ヶ岳より縦走(第一隊を手伝う)
	法3	桑田 結
	船窪岳より縦走(第二隊より)	
補給隊	第零隊(奥穂高)	
	リーダー	英3 福山 剛 (第一隊を手伝う)
	經3	隅田 智
第一隊(槍ヶ岳)	リーダー	英3 北出 孝継
	經2	榎本 篤
	新1	山上 隆
	法1	下 文
第二隊(船窪岳)	リーダー	法3 桑田 結
	經2	上野 雄彦
	撤収のリーダー	新2 亀岡 清隆
	法1	日比 進一
第三隊(遠見より白岳)	リーダー	英3 北出 孝継
	經3	隅田 智
	英3	北出 孝継
	經1	石谷 文敏
	經2	榎本 篤
総計		十四名

きゆう屈な姿で寝込んでしまった。汽車は三人の若人の夢をのせて一路信濃路を指して走る。

三月十一日

松本に着くと雪が降っていた。駅前タクシー会社に飛び込んで雪の状態を聞く。

「二、三日前からハ、えれえ雪が降るだけで上高地方面は奈川渡までしか行かねえだ」。

「あきまへんか？しやないなあ。」柳川がうまい事を云いながら遂にストープの横へ入り込む事に成功、僕も続いて

「私鉄ストが無いだけでもましや。」と云いながらその横に、隅田は当然の様な顔をして入つて来る。これで三人共夜明けの一番電車まで寒さ知らずだ。

島々駅、バスは番所まで入っている。道は数日米の降雪に深く埋もれて、行く手の崖から小さな雪崩が落ちて来る。右



新村橋より見た前穂高

手は数十米の断崖の下に梓川が流れている。前川渡で僕達を降したバスは、ガソリンの煙を残して雪の谷間に吸い込まれて行つた。

九時十分、いよいよ出発だ。雪がしんと降っている。道は雪崩で寸断されている。膝までのラッセルで沢渡へ。

約一時間で到着、ここに僕達に必要な炊事道具、ザイル、燃料等がサポート隊の手によつて運ばれている。六日に出たサポート隊はこの降雪に百貫の荷上げで相当のアルバイトだつたらう。霞沢発電所の横を通る。ここはこの沢随一の大規模なものだが、水量の少ない為かねむつている様だ。

単調な雪道も雪のゆるみから雪崩の危険があり油断は出来ない。行く手をデブリがさえぎり、道はだんだん細くなり、深くなつて行く。

やつと山吹トンネルに來た。トンネル内はツララが大きく垂れ下り、床の上には山の様な水がもり上つて這い出す程の穴しかない。

又単調な道が蜿蜒と続き、いやになつて来る。清水トンネルを出ると上

野、日比が槍沢のサポートの手伝いをすませて下りて来るのに出会う。「ヨオ、御苦労さん、どんな調子や。」僕は荷を置くのも忘れて様子を聞く。

「皆元気や、今日S1全員横尾へ入つたら下りて來た。皆真黒に陽焼けしてるわ。」

ニコニコ笑いながら上野が答える。「荷上げ、奈川渡から難儀したやろ。」

「うん。まあな、アタック隊頑張つてや、サイナラ。」又船窪で逢はうやい。

固い握手を交して彼等は下つて行く。ザックに着いた関大のマークがいつまでも目に残つた。

急な曲角を曲ると坂巻温泉が目の前に現れた。雪に埋もれた山の中の静かな湯に浸つていると、山旅の嬉しさがこみ上げて來た。

僕等の青春時代はこの清らかな、美しい自然によつて祝福されているのだ。吹く風の音、水の音、雪の白さ、山の美しさ、峯の氷、岩、暖い友情、総てのものが何よりも僕の心をひきつける。

三月十二日  
雪が舞っている。今日は上高地まで道は雪崩で寸断されているので思う様に進めない。釜トンネルは雪で入口はふさがつて這つて入る小さな穴があるだけだ。真暗な中へ這い込むと暗い。水が少し流れているので昼食にする。電灯を

### 登山用語解説

アイゼン―氷の上を歩く時滑らぬ様に履くスパイクの様なもの  
キレット―稜線が急に切れ込んでいる所

コル―鞍部、峠の様な所  
ザイル―登山用綱

ルンゼ―せまい急峻な谷状の所  
トラバース―横断

サポート―補給又は補給隊  
ヤッケ―アノラックコート又は防風着

スベアorプリムス―ガソリンコンロの名前  
ザック―リックザック

ツェルト―簡単な防風テント  
ラッセル―除雪、雪の中をふみかためて登る

フィルムクラスト―雪の表面だけが氷になつている  
ピーク―頂上

シユラフ―水鳥の羽毛の入つた寝袋  
ハーケン―岩や氷に打ち込んで登攀の用に供する釘状の鉄片

カラビナ―ハーケンとザイルを連けつする鉄の環  
三ツ道具―ハーケン、カラビナ、ハンマー

アイスパイル―氷の壁などを登る時に使う特殊のハンマー  
ワカン―雪の上をあるく時もぐらない様に使用するガンヂキ

つけて歩き出す。出口の穴から出て見ると、急に寒さが身にしみてこたえる様になつた。もう山の中だから寒いのも当然だ。焼の麓、大正池の堰堤附近から風が

強くなつて来て、この辺の荒涼たる風景に応援をする。夏の上高地は夢の様な神秘的な美観があるが冬は全く殺風景だ。

単調な道は、やがてスイス風の赤い屋根の立派な帝国ホテルで終る。冬はあまり人の訪れる事もない上高地に豪華な姿を誇っているこのホテルは世に取り残された様にあまりにもわびしい。

ホテルの管理者木村氏宅へ。

大きなストーブはゴーと音を立てて燃え出し夕食の用意は出来上る。学習院大のパーティがポッカに下りて来て、僕達のサポーター隊の状況を知らせて呉れた。いよいよ槍ヶ岳への荷上げは開始されたいらしい。総ては計画通りに進展している。穂高岳の稜線で全パーティが活躍するのは数日後にせまつて来た。

満ち足りた思いで、食後の一と時を過す。外は闇夜で吹雪がごうごうと音を立てている。数日來の降雪はまだ続くだらう。

### 稜線への登り

三月十三日

吹雪は嘘の様に晴れ上り、西穂の粗々しい稜線に続いて岳沢、明神岳がくつきりと紺碧の空に鋭い線を描いて僕達を呼んでいる。今日の行程は上高地から横尾までだ。

木立の中をスキーをはいて登れば、明神岳がこの世のものと思へない様な、神

々しい姿で輝やいている。明神からは河原の中を進む。全くの快晴に、ぽかぽかと暖められながら進むと両側の景色は少しずつ変つて行く。歩いていると汗が出て来るが、それでも温度は下だ。左には屏風岩が黒々と偉容を誇り、右側の木立の中に、厚く雪をかむつた横尾小屋が見える。福山が「オース」と声をかけて来た。握手、熱い紅茶のサービスを受けシユラフに入って今日迄の行動を話す。



（殺生附近）の登り 槍沢

福山もサポーター隊の苦勞を話して呉れた。夕方になつてサポーター隊が槍ヶ岳の荷上げを終へて帰つて来た。

久しぶりの対面で、雪焼けした黒い顔が笑顔になる。北出が今日までの模様を話して呉れる。荷上げは連日の悪天と、深い雪のため思はぬ苦勞をしたらしい。尽きぬ話には夜は更けて行く。明日はサポーター隊は槍沢の中継キャンプに上る。僕達は明後日の夜中まで休養だ。

次の朝早く槍隊はガタガタいなしながら出発した。僕達は昼間の雪崩をさけるために夜中行動をするので今日一日は暇だ。寝ころんで本を読んだり、歌をうたつたりしながら時を潰す。

夜中二時すべてのものが凍つている。サポーター隊福山、隅田と共に小屋を出る。横尾本谷も深雪のためスキーが一尺以上埋まつている。汗を流してのラッセルだがスピードは少しも上らない。本谷との合流点付近からは全くの急斜面で、荷を負つた僕等は息が切れそう

だ。途中デブリが二ヶ所あつた。空が白んで来て夜あけの近い事を告げる。

涸沢小屋は二階の屋根が十程程見えていた。スキーをデポしてワカンに履き換える。太陽は僕達に恵みを与えて呉れて周囲の山々は赤から白に、青にだんだん輝き出す。陽が当つて来ると岩や雪までが生氣を取り戻した様に生々として来る。奥穂のコルは目の前に見えているのに、僕達は未だザイテングラードにも達していない。雪の中を胸まで埋まりながらのらららと「かたつむり」の様に進んでいるが、コルは次第に遠くなつて行

く様にさえ思われる。風はおさまりに聞えるものは苦しい登高の息使いだけだ。ザイテンの取付から雪の状態は良くなつたが、陽が当つて来たので心配だ。

僕は必死の思いでワカンを動かす。ピッケルを横について這う様に一歩毎登る。十歩もすれば立上つて息をととのえる。もうコルは問題ぢやない。目の前の岩が目標だ。数米、数米、目標に達すると又上の目標を決める。陽は高く昇つて、今度はうだる様な暑さが僕達に「課せられる。のるのと、しかし確実にコルは近づいて来る。

コバルトブルーの空に笠ヶ岳が白く輝やいた天国の窓は、やつと足下になつた。身体中で血が踊つている様だ。烈風に吹かれながらあたりを見まわす。

前穂高、北穂高が鋭いピークを競い、足下には今登つて来た涸沢の底にトレースが点々と続き雪の中に消えている。穂高小屋の二階から中へ入ると氷の花の咲いた天井は稜線のきびしさを物語り、風の音は僕達に激励の言葉の様に響く。天国の様に暖く感じる小屋の内は12だ。

### 第一步は始まつた

素晴らしい防寒装備や能率の良い器具が僕達に支給された。すべてが新しく合理的な装備で僕達はうれしくて小おどりせんばかりだ。

三月十六日

こんな素晴らしい装備に身を固めた男が二人高曇りの稜線を前穂高に向う。小屋ではサポート隊が見送っていたが、二人の男は岩の間に消えて見えなくなつてしまつた。

奥穂高の頂上までは岩と雪の交錯だ。そして目の前に前穂高が見える。雪の帽子を下り一気に前穂頂上に迫る。午前十一時丁度。ツェルトを出し、中に入つて昼食を取る。

終つてもう一度あたりを見まわす、奥穂に続いて西穂高の稜線がノコの歯の様に並び、槍ヶ岳が中空高く偉容をほつてゐる。富士、南アルプス、中央アルプスが見えている。下には上高地が静かにねむつてゐる。雲の彼方に白馬岳が小さい一点となつて見える。僕等はあの小さなピーク、白馬までの縦走に出発するのだ。そしてその出発点がここなのだ。柳川と固い握手を交わす。そして頂上に別れを告げ帰路につく。一步一步が嬉しく楽しい。しかし足下は千五百米の岳沢の下まで直通である。不安定なトラバースが二ヶ所あつて奥穂に戻る。途中奥穂から前穂へ向うパーティに出合う。

小屋へ帰ると「御苦労さん。」サポートの福山、隅田が迎えて呉れる。タバコ、紅茶のサービスがあつて静かな夜が又訪れる。

三月十七日

朝五時、サポート隊が下山の為小屋を

出たが十五分程して戻つて来た。雪ダルの様になつて息をはずませながら「ラストした上に新雪が積つて今にも雪崩そうや。」

「外はえらい吹雪やで、当分あかんな。」四人共やけになつて朝の六時から歌をうたう。

山の歌に始まり、マンボ、軍歌、独逸、さては浪花節まで飛び出す。

「旅行けば一駿河の国は茶の香り。」

い。解つてゐるのは唯一つ「山が好きだからだ。」

三月十八日

朝「行くぞ。」言葉は少ないが友情のこもつたサポート隊の声を聞いて僕達はシュラフの中から返事をする。「有難う。注意してな。」

二人は下山した。食糧をへらさない様に朝めしも食わずに――

僕等は用意をして北穂へ。ナイロンザイルは扱いが楽

で、調子良く悪場を通過して湖沢岳のコレで休憩。ルンゼの間

から湖沢の底が見える。雪を落すと玉の様な

つて地極の底に散つて行つた。

ザイルが間断なくゆるんだり張つたりしながら進んで行く。アイゼンの爪が岩に当つて「キキッ」と不気味な音を立てる。澗谷も目の前に見えて来た。そして北穂の丸い雪のピークは僕達の足下になつた。前穂が雪煙をあげ槍は手のとどく様な所にある。

北穂の小屋は雪の中五米位の所に埋まつているが入口をうまく掘る。中は美しく整頓してあり、全く快適だ。久しぶりに布団を敷き、茶わんでめしを食う。夕方

頂上に出て見ると鹿島槍が見えた。横尾谷には今朝下山した福山、隅田のシュプールの美しくついている。安全に降りたらしい。槍のサポート隊はどうしているだろうか？（この頃槍沢では縦走隊の食料、燃料、装備の荷上げに苦しい登高が毎日続けられていた。そして船窪のサポート第二隊は連日の新雪に首まで雪に埋まりながら中継キャンプ建設と、ルートの開拓の戦が続いていた。）小屋の記録簿に熱心に書き込んでゐると、夕闇は北アルプスの山波を包んでしまつた。

暖い布団で寝るのは幾日ぶりだろうか？

三月十九日

キレットの下りは雪の急斜面から始まる。ザイルがぐんぐんのびて停止する。今度は僕の下る番だ。深い雪なのでスリッパの危険は少ない。雪の状態は良く雪崩そうにない。

すごいスピードで降りる。天気が悪くなつてガスがまいて来た。ルートは二つ、一つは夏道通し、今一つは北穂の北壁だ。「よし、北壁だ。」カールの底に直通に小さなルンゼがあり途中二本に別れて下の方は見えなくなつてゐる。ルンゼは今にも雪崩る様な感じだが、僕は自信を持つて下る。両側がせまつてルンゼは益々せまくなり急傾斜になつて来る。

そして北穂北壁に出た。六十五度位の

歌いつかれて又ねむる。

外では間断なしに吹雪が荒れ狂つていた。夜九時頃になつて雪は止み、風だけになる。月が出て空は晴れ上つて来た。

「お。の奥穂から眺めた月は白く輝き、世の中のもの全部が死に化した様な感じがあつた。

何のために僕達は山へ登るのだろう。苦しみの中に見出す喜び、理想へのあこがれ、向上の精神――、考えても解らな



奥穂高より槍ヶ岳を望む

## 氷と岩の壁

三月十九日

キレットの下りは雪の急斜面から始まる。ザイルがぐんぐんのびて停止する。今度は僕の下る番だ。深い雪なのでスリッパの危険は少ない。雪の状態は良く雪崩そうにない。

すごいスピードで降りる。天気が悪くなつてガスがまいて来た。ルートは二つ、一つは夏道通し、今一つは北穂の北壁だ。「よし、北壁だ。」カールの底に直通に小さなルンゼがあり途中二本に別れて下の方は見えなくなつてゐる。ルンゼは今にも雪崩る様な感じだが、僕は自信を持つて下る。両側がせまつてルンゼは益々せまくなり急傾斜になつて来る。そして北穂北壁に出た。六十五度位の

氷と岩の壁だ。荷を負って慎重に岩場に  
移る、一步一步気をつけて氷と岩の壁を  
下る。ザイルの終りを知らせる柳川の  
声、遂に小さな足場に立つ。アイゼンが  
足場からはみ出す程の小さな所だ。壁に  
ピックルを打ち込むが入らない。壁にザ  
ックを負った背中をつけて、そのフリク  
ションで確保が始まる。

岩陰からザイルが少しずつ下りて来  
る。柳川が見え出した。不安定な足どり  
だ。

「ゆつくり、慎重に。」と僕は懇願する  
様にいう。返事は無い。

落ちれば——。こんな不安定な確保は  
初めてだ。足許がぐらぐらゆれている。  
一步一步壁から抜ける地点が近づく。  
そして壁のルートは勝ちとられた。続け  
て僕も。雪の斜面に達してほつとする。  
ゆつくりとした気持でカール底へ。吹雪  
の中で煙草をつけて思わず「にやり」と  
する。

「柳川、下りたなあ。」「うん。」

今度は鞍部へのラッセル。胸までの雪  
と戦いながら登る。キレット通過は三時  
間足らずで終わった。

風雪が舞つても僕達の心は暖い。吹雪  
の中を快適な速度で最後の登りにわか  
る。槍の小屋が目の前だ。

「キーターデー」とどなると冬期小屋か  
ら北出始めサポート一隊のメンバーが飛  
び出して来た。握手。こうして縦走隊は

サポート一隊に迎えられた。夜おそくま  
で御馳走に舌つづみを打つて話は続いて  
いた。

## 風雪列車

三月二十日

槍の頂上はガスから解放されて朝日に  
輝いている。蝶、常念岳も赤から白に変



雪の梓川を渡る

つて来た。大槍の頂上へ。良くしまつた  
雪は岩に堅くくい込んでアイゼンが気持  
良く利く。

頂上からは昨日迄の穂高山塊が黒く、  
反対の白馬の方は真白になっている。西  
鎌の下りも悪くない。明日は行くぞ。と  
決めて小屋へ。

午後は栄養を貯へるため食つて食いま

くつた。腹が大きくなるとシュラフの中  
で軽音楽のど自慢大会を開く。

「佐渡へー佐渡へと草木もなびくうー  
ー」

冬期小屋が割れそうな大声だ。  
外では又吹雪が舞い出した。

三月二十一日

翌朝、風雪列車の発車のベルが鳴る。

吹雪の中を静かに動き出すと西鎌の下り  
は正面からの風を受けて目も開けられぬ  
位だ。まつげが凍つて来る。息も出来な  
い。稜線は見えず、勿論斜面など見える  
筈もない。前を歩いている人間も見えな  
い。体全体が凍つて固くなつて行く様な  
気がする。

「無理だ、これ以上は無理だ。」黙々  
と今来たトレースをたどつて槍へ引き返  
す。風下でも息が出来ず、下を向いて口  
をアップアップさせながら少しでも息を  
吸はうと試みる。心臓は早鐘の様に打つ  
て来る。死のほいのする頃、やつと小  
屋は近づく。温度計は $-22$ 。で玉の中に  
水銀が入り、これ以下は計れない。小屋  
の中に吹雪が舞っている。皆だまつて天  
井を見ている。何を考えているのだろう  
か？突然誰かが「うなる吹雪も子守唄」  
とどなつた。

三月二十二日

今日も吹雪いていたが十時頃になつて  
少しおさまつたので出発。

北出は西鎌の下まで見送つて呉れた。

「鹿島槍で又逢はうや。」

「気をつけてな、槍沢の下りは悪いで」  
北出はだまつて西鎌を登つて行った。

別れたとたんに又胸までのラッセル。

視界が悪く変な所をトラバースしたり岩  
を登つたり下つたり懸命に進む。雪と風  
とで休憩する気もない。

雲が割れて縦沢岳が青い空から頭を出  
した。凄く高い。真向からの風を受けた  
登りは苦しいが頂上に一步一步近づく。  
夕日が乱れ飛ぶ雲の間から時々顔を出  
し、頬や睫の氷をとかして呉れる。双六  
小屋の屋根が少し見えて来た。夜は菊池  
が縦走に加わつたので少しにぎやかな  
つた。

三月二十三日

双六小屋の朝、鷲羽が見えるが風は相  
変わらず吹いている。双六の登りは胸まで  
のラッセル。やつとクラストした斜面に  
出たと思つたら今度はラッセルの代りに  
風の拷問だ。三俣蓮華のピークに出ると  
ほつとしてしまう。

少し陽が出ていたが雲の中に入つてし  
まつた。蓮華小屋は雪で判らない。この  
辺はクラストが割れて、一步毎に尻にか  
かつた様に歩けない。泳ぐ様にして鷲羽  
の登りに出る。北穂、槍の順にガスに包  
まれてワリモ岳附近から遂に嵐は爆発  
した。ツェルトに入り昼食をとるが風は  
ツェルトを通して入つて来る。

歩いていても高低が見えない。もう一

時だというのに予定の半分しか来ていない。赤岳の下りで遂に前進を断念、雪底を利用して雪洞を掘る。一時間半で出来上り、人間の住む最底の条件だけがそろつたこの穴に入る。ただ今の僕達には天國の御殿の様な気がする。

翌日も吹雪はうなり狂つていた。外はいくら荒れても雪洞内は天国で、気温も。で暖い。案外暖に夜をすごし朝が来た。三月の二十五日だ。太陽は姿を見せないが視界は咫尺はある。凍つたオーバーシューズを履き、風雪列車は又動き出す。

例によつてノンストップの急行だ。昨日の偵察に出たお陰で速度はぐんぐん上る。風雪特急列車は燃料補給のため東沢のコレで停車する。食つてしまつと又出発。

野口五郎岳の登りは雪が無く、夏道が出てくる。風がともすれば僕達を吹き飛ばそうと試みる。だけどピッケルとアイゼンがそれを拒む。頂上では風の拷問を受け、長居は無用と三ツ岳へ走る。風がおさまつて来たが空は暗い。三人共黙々として歩いている。何も考えないで歩いているのだろうか？

三ツ岳を稜線通して通過して二回目の昼食、気温は15。だが風が無いので暖い。

ゆつくりと三ツ岳を下れば烏帽子の小

屋が見えて来る。雪は少く、アイゼンで歩く割れて地肌が出る。高瀬側は10米位の雪庇だ。コレからの登りは又首までのラッセル。風の拷問が終つたら今度は雪の拷問だ。柳川がトップをラッセルして小屋に近づく。



遠見小屋への登り

小屋の窓が開いている、サポート隊だ。

「カイザー関大、力あり。」と大きな声でどなりながら走り出すが、小屋の中は雪が沢山つまつているだけだ。

失望のあまり、しばらくは物も云はずに座り込んでしまう。

「サポート隊は一生懸命戦っているのだ。こんな事で気を落すな、自力でどこ迄も進むのだ。」こんな声がどこからか聞えて来る様な気がする。

外では又吹雪が勢力を盛り返し、あたかも太陽と僕達の祈りを奪つて嬉しそうに「ゴーゴー」と勝利の歌を合唱しているかのようである。

菊池は例の如く朝食の仕度五時。外でも例にもれず吹雪の悪魔の叫び、何時になつたら天気が良くなるのか？気分が滅入つて来る。朝食を済ませてでもシュラフから出る気もしない。こう吹くと情なきを通り越して反対に意地にも頑張つて見せるぞ！

肉も玉ねぎもナタで割る。それでも食べる事は一番の楽しみだ。煙草も柳川と二人で一日に六十本ずつ正確に無くなつて行く。だけど煙草は千八百本もあるんだから大丈夫だ。

夕方青空が見えたと思つたら又元の吹雪になつてしまった。サポート二隊が気がかりになつて来た。(この頃サポート二隊は中継キャンプから船窪までの荷上げに懸命の努力をしていたのである。予想外の積雪と人員不足で予定していた荷上げの日数より数日遅れた。同じ頃、遠見尾根では奥穂に上つた零隊の隅田が参加して新しい任務のサポート第三隊として西遠見の中継キャンプへ荷上げの最中だった。)

## 立山が青く光っている

三月二十七日

朝八時頃青空が見えて来た。それ出発だ。ワカンを履いてラッセルは続く。池附近から、東側は全くの晴天になつて、燕、ガキが青黒い姿を現はした。クラストした南沢岳を登り切ると目前に針ノ木岳、立山が雲の間に姿を現はし僕達をまねいている。

「雪は消えねど——春はきざさぬ——。自然に歌も湧いて来る。南沢のコレで昼食、雄大な針の木岳の偉容に思はずカメラが動く。

不動の登りにサポート二隊は来ていないか？と上ばかり見るが一向に姿を現さない。

だけど晴天とはこんなに楽しいものか？ 苦しい登りも時間の経つのは早い。吹雪の日などは昼までの行動が一週間のように感じるが——。

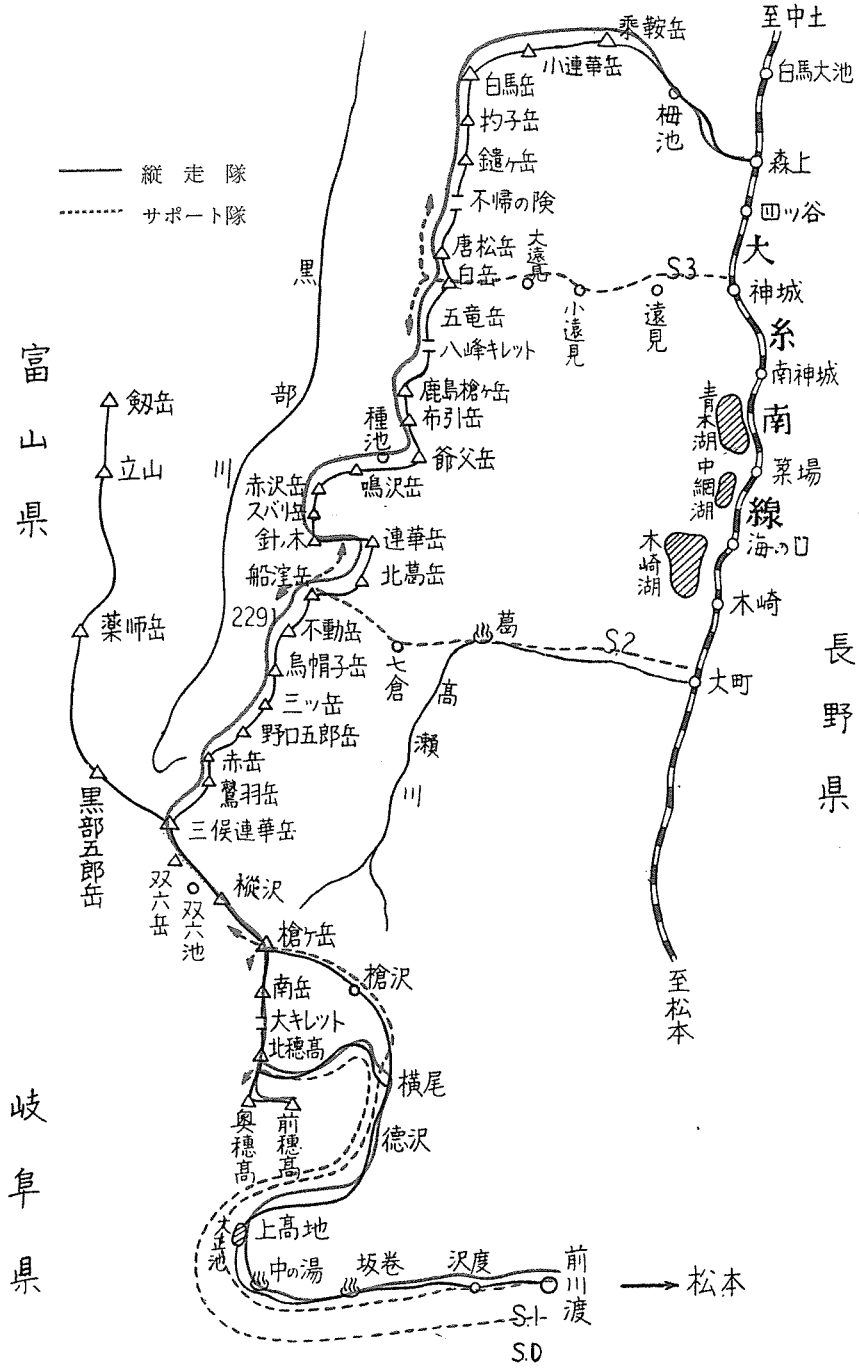
不動を登り切ると目前に七倉岳が見える。豪快な眺めにしばし時を忘れる。突然下の方で声がした。サポート二隊だ。うれしくて小おどりせんばかりだ。

だけど森林帯の中を首まで埋まりながらの下りは思う様に抄らない。地獄の様な雪の中を三十分も下つた頃突然目の前に五人の元気な顔が現れた。昭和山岳会だ。

挨拶が終つて稜線の様子を語り合う。



# 積雪期北アルプス全山逆縦走略圖



積雪期北アルプス全山逆縦走行動一覽表

月 日	縦 走 隊	サポート第零隊	第 一 隊	第 二 隊	第 三 隊
3. 6			大 阪 発	大 阪 発	
7			沢 渡 ⇄ 坂 巻	葛 → 七 倉	
8			沢 渡 → 坂 巻 ⇄	葛 ⇄ 七 倉	
9			坂 巻 ⇄ 上 高 地	葛 ⇄ 七 倉	
3.10	大 阪 発	大 阪 発	上 高 地 ⇄ 横 尾	七 倉 ⇄ A 点	
11	松 本 → 坂 巻	坂 巻	上 高 地 → 横 尾	休 養	
12	→ 上 高 地	→ 上 高 地	休 養	七 倉 ⇄ A 点	
13	→ 横 尾	→ 横 尾	横 尾 ⇄ 槍 沢	七 倉 ⇄ A 点	
14	休 養	休 養	横 尾 → 槍 沢	停 滞 (吹雪)	
15	→ 奥 穂 コル	→ 奥 穂 コル	槍 沢 ⇄ (偵察)	(A.C) 七 倉 ⇄ 前 進 キヤムブ	
16	コル ⇄ 前 穂	キ ー パ ー	槍 沢 ⇄ 槍 岳	七 倉 ⇄ B 点	
17	停 滞 (吹雪)	停 滞 (吹雪)	停 滞 (吹雪)	七 倉 ⇄ B 点	
18	→ 北 穂	→ 上 高 地	槍 沢 → 槍 岳	七 倉 → A.C	大 阪 発
19	北穂→キレット→槍	→ 下 山	停 滞 (風雪)	A.C → 船 窪 小 屋	神 城 ⇄ 遠 見
3.20	槍 ケ 岳	帰 阪	槍 ケ 岳	船 窪 ⇄ A.C	神 城 ⇄ 遠 見
21	槍 ⇄ 西 鎌		槍 ⇄ 西 鎌	休 養	神 城 → 遠 見
22	槍 → 双 六		休 養	休 養	神 城 ⇄ 遠 見
23	→ 赤 岳 雪 洞		待 機	船 窪 ⇄ A.C	遠 見 ⇄ 大 遠 見
24	停 滞 (吹雪)		槍 → 横 尾	停 滞 (風雪)	遠 見 ⇄ 小 遠 見
25	雪 洞 → エボシ		→ 坂 巻	船 窪 ⇄ A.C	遠 見 → 大 遠 見
26	停 滞 (吹雪)		→ 下 山	停 滞 (風雪)	停 滞 (風雪)
27	→ 不 動 雪 洞		帰 阪	船 窪 ⇄ 2291	大 遠 見 → 白 岳
28	→ 船 窪			船 窪 ⇄ 2291	白 岳 ⇄ 小 遠 見
29	→ 針 ノ 木			船 窪 ⇄ レンゲ	白 岳 ⇄ 大 遠 見
30	→ 新 越 雪 洞			船 窪 → A.C	白 岳 ⇄ 唐 松
31	停 滞 (吹雪)			停 滞 (吹雪)	停 滞 (吹雪)
4. 1	→ 種 池 雪 洞			A.C ⇄ 船 窪	停 滞 (吹雪)
2	→ 鹿 島 槍 雪 洞			A.C ⇄ 葛	白 岳 ⇄ 五 竜 岳
3	停 滞 (吹雪)			→ 下 山	停 滞 (吹雪)
4	→ 白 岳			帰 阪	白 岳 ⇄ キレット
5	→ 天 狗 池 雪 洞				白 岳 ⇄ 不 帰 嶮
6	→ 白 馬 岳 → 柵 池				白 岳 ⇄ 遠 見
7	→ 森 上				白 岳 → 遠 見
8	→ 下 山				→ 下 山
9	帰 阪				帰 阪

は縦走隊と出逢つた日

A.C=前進キヤムブ

昭和山岳会は不動沢で事故を起したそう  
だ。だがもう大丈夫との事、お互いに無  
事を祈り合つて別れる。槍出發以來初め  
て逢つた人達だ。

後は苦しいながらもトレースのついた  
森林帯を一生懸命下る。二二九一のピー  
クとのコルでトレースは終りになった。  
煙草を吸つて又首までの雪と戦いながら  
必死の思いで登り出す。もう二時半を過  
ぎている。さすがに体も疲れて来た。頑  
張つても船窪までは行けそうにない。

雪の深そうな所をえらんで雪洞を掘り  
出す。雪洞の中から立山が今まで見た事  
もない位青白く、けだかく光っている。  
中からは満ち足りた三人の若人の楽しそ  
うな歌声がもれて来る。

### サポート第二隊との握手

三月二十八日

雪洞の夜は明けた。そして今日も又晴  
れた。朝から首までのラッセル。三十分  
も登つた頃、両側が雪庇と岩稜になつた  
ピークに行く手を阻まれて行きづまつて  
しまつた。荷を置いて偵察に出たがどち  
ら側も容易に登れない。

引き返して岩稜に直接上つている小さ  
なルンゼをガムシヤラに直登する。股の  
下から黒部の谷が見える。やつと岩頭に  
立つて今度は、反対に下にステップを切  
つてトレースをつける。そして荷を負つ

て又そのステップを上る。空は目にしみ  
る様に青く、雪は逆光に輝やいている。  
空身で二二九一ヘトトレースを付ける、や  
つと頂上だ。七倉岳は手のとどく様な近  
くだ。稜線にトレースがあり、その先端  
がぐんぐんこちらに延びて来る。サポー  
ト二隊だ。ヤホイヤホイの連発。第二隊  
と応答。

「紅千里、桃源の、理想が丘の空高く」  
。



場 (ズバリ岳)

三人で声の続く限りとなる。苦しかつ  
た森林帯のラッセルもこれで終りを告げ  
た訳だ。

急な斜面を雪崩を起さない様にゆつく  
り下る。雪の状態は悪く、途中巾三十米  
の板ナダレが黒部の谷へ散つて行つた。  
僕はザックを置いて雪庇を落しながら  
ほとんど落ちる様に垂直に下る。上野、  
亀岡、日比、続いて桑田の顔が見える。  
コルに着いて握手、嬉しくて涙が出て来

た。  
柳川、続いて菊池が垂直の様な雪の壁  
を慎重に降りて来る。ゆつくりと――。

コルに達して又握手が始まる。上野と  
菊池は抱き合つて喜んでいる。僕は上  
にザックを置いて来たので又雪の壁を数種  
ずつジリジリと登る。二十分程でザック  
に達して一息入れる、落ちる様にして又  
コルへ。

槍穂高が白煙をなびかせている。

サポート隊三  
人に荷を持つて  
もらつて船窪  
へ。

船窪のキレッ  
トは、やはりフ  
ィックスザイル  
が張られてあり  
大いに助かる。

昨日はこの  
コルまで七時間

の下りのラッセルだつたらしいが、今日  
はトレースのついた登りを二時間で小屋  
へ。第二隊の苦勞に感謝の言葉もない位  
だ。雪が少し降つて来た。

小屋は今僕達の立つている雪の下二米  
の所に、二階の屋根がある。落ち込む様  
にして小屋に入るととても暖い。日比コ  
ック長によつて焼ソバ、カレー、ぜんざ  
い、コーヒーと続々作られて縦走隊歡迎  
大食会は夜遅くまで続く。話は山ほどあ

り、皆が興奮している。桑田が明日から  
縦走に加わる事になつた。

三月二十九日

朝の太陽は紅の贈物を不動岳の頂に投  
げて、北アルプスの山波は一日の活動の  
原動力を得た様に、生き生きと輝やいて  
いる。

白樺の木の間から朝日に浮ぶ穂高山塊  
が、堂々たる姿を見せている。小屋の中  
も外も新しい力がみなぎつて希望に燃  
えている。先ず三人のサポートが七倉の  
ラッセルに飛び出した。四人になつて縦  
走隊はラッセル車の後をゆつくり登る。

針の木岳は目の前にそびえ、西稜がカン  
チェンジュンガの東北山稜の様に粗々し  
く登高欲をそそる。北葛岳の頂上からは  
大町平野が黒く見え、春の息吹きが感じ  
られた。蓮華岳のコル九時半着。

ツェルトの中に入つて第一昼食を取  
る。紅茶が全員の空気をなごやかにす  
る。

「気をつけてな、撤収は無理をせん様に  
な、充分食つて、充分燃やして、心ゆく  
まで山を楽しんでな。」

「縦走隊頭張つてな。」「まかしとけ。」「  
固い握手は団結の証だ。十時、サポ  
ートと別れて蓮華の岩場を登り出す。彼  
等は機関車の様な馬力で北葛岳の頂上へ  
消えて行つた。

二年以下三名での撤収。相当なアルバ

イトだろう。全く船窪のサポートは良く利いていた。七倉尾根は相当のアルパイトだが、こんな有効な場所は他にない。S<sub>2</sub>隊の献身的な努力に対しても頑張りねばならない。突然起る烈風にザラメ雪が舞い、顔が凍つて来る。

蓮華頂上からは穂高はいよいよ小さくなつて、反対に鹿島槍が大きくなり、白馬岳が重なるように見える。随分来たものだ。風にも、雪にもめげず、真黒になつて懸命に登る。好きでなければ山になんか来れないものだどつくづく感じる。

快適な下りを針ノ木小屋へ。二階の窓が開いている。飛び込んで、昭和山岳会から進呈された餅を腹一杯食う。

船窪の三人はどうしているだろうか？安全に降りて呉れる事を心から祈る。

烈風が吹いているが明日も天気は良いらしい。あと五日で白馬だ。

天の神よ、僕達四人に限りなき幸を垂れ給へ。

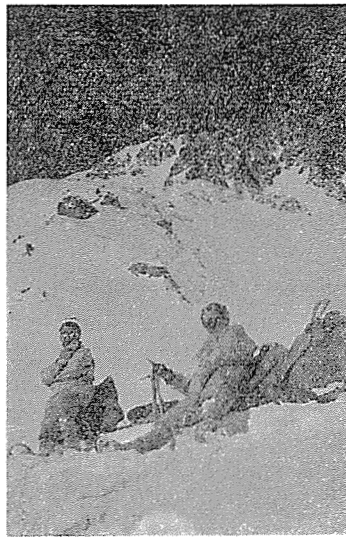
三月三十日

物凄い風の音に、夜中に幾度も目を覚まし、朝起きた時は全員頭が変だつた。それにしても何という風だろう。僕達は出発出来そうにもない。しばらくためらつていたが出発の合図をする。

針ノ木の登りは稜線通しだ。風でともすれば体は麓川側にたたく落されそうになる。風で雪庇が大きく発達して、乗り越すのに散々苦労する。風にさからいな

がら一歩毎に急斜面は短くなり遂に頂上がやつて来た。

劔岳が見えて来た。劔の一番迫力のあの季節は秋だ。新雪がべつとりと付き、まるで、グランドジョラスの様に仰天する光景が出現するのだ。春の劔岳は残念ながらその迫力に欠ける。穂高以来のガラガラの下り、針の木はやはり面白い。風がおさまり、高層雲が空一杯にひろがつて来た。



止小休のグランドデイング湖沢

れで当分動かないで済む。他の者も同じ考えなのか一向に腰を上げない。「坐つていて頂上が来ると良いのに。」と思でもない考えて頂上を見上げるが、厳然とした頂上はにつこりともしない。だまつて四人は歩き出した。

新越——今日の目的地——が下の方に雪を沢山つけている。行程は予定以上にはかどつた。

逆光に赤白く、神々しいまでに輝やいた立山を屏風に立てて

の雪洞は何と楽しい事だろう。気温は入山以来の最高で0度を示し、オーバーシューやアイゼンバンド等の濡れ物もほとんど乾いて行く。夕闇が迫り、シルエットに劔岳が青黒く浮き上り、夢の様だつた。

「明日は悪くなるかも知れんな。」  
「うん。今日で行ける所まで足を延ばして置こうや、明日はわからんからな。」

昼食を摂っていると、折からの突風でポリエチレンの袋が空高く舞上り、蓮華の方に遠く飛んで行つた。

赤岳の登りは全くこたえる。単調な雪の細い稜線を一生けん命登る。もう頂上だと思つたら又その上にピークが頭を出す。遂に僕は体を雪の上に投げ出す。こ

消えた。  
南京豆、紅茶、かりん糖、カレーと見る内に消えてしまつた。

夕方青空が見えたが又、元の吹雪に戻つた。明日は四月一日、僕等はもう四年生だ。何かしら恥かしい様な気がする。のど自慢大会を開いて腹へらしをするが腹が大きくて寝つけない。

エイプリル・フール

四月一日

五時頃に起きて外を見ると青空が見えて来た。六時半雪洞を後にした。青空は東の間で、すぐに名物の黒部の烈風と雪の贈物だ。視界は二十米位、手さぐりの様に進む。

岩小屋沢岳では風は頬を打ち、それが凍つて氷が頬にバリバリと張りつき、唾は氷砂糖の様によく、つららが出来ている。風で一瞬仲間が見えなくなり手さぐり、足さぐりで這松の間を這う様に進む。

岩小屋沢の氷の斜面に小さく這つている僕達はまるで地獄の釜の蟻の様に苦しんでいる。尾根は急に下りになった。こんな地形におぼえは無い。偵察が必要だ。柳川が偵察に出る。足の指は感覚が無くなつて来た。考える能力もにぶつて来た。天候は益々悪くなり朝だというのあたりは暗い。遂に行動を中止する。凍つた手でスコップを握り、雪洞作業が始まる。気温は零下十八度以下つた。

エイプリルフルは全く素晴らしい天候を僕達に贈つて呉れたものだ。

四月二日

朝、雪洞の入口に出ると鹿島槍が雲の間に現れて来た。出発だ。爺岳は全くのクラストで、穂高以来は続けたアイゼンの爪では歯が立たない。突風が吹きつけて僕達は幾度と滑落しそうになる。誰もものをいわない。冷の小屋の屋根の上で最初の休憩。ツェルトは凍つてバリバリだ。手袋も固くなつて氷を握つていゝのと変りは無い。時々出ていた太陽は雲にかくれた。そしてその代り風が吹き出した。これで僕達の行動を阻止する条件は立派に整つた。

布引岳の登りは桑田のラッセルで開始された。ピッケルの上に体をもたせて大きく息を整へ、十歩毎に苦しみから解放される大きな息がもれる。鹿島槍北峯の頂はやつと僕達と同じ高さになつた。「助けて呉れ！こんな地獄の様な所はもうごめんや。」

ただ僕達は三ヶ月前の冬山で来たこの頂上に、今度は、はるばるとあの前穂から無事に来れた事に対する神への感謝を捧げずにはいられなかつた。僕達が此処まで来る事の出来たのは僕達自身の技術だけに依るものではない。総ての人達の援助と、僕達の努力を正当化する幸運の結果なのだ。逃げる様にして約尾根へ。そして又雪洞の作業だ。

夜、食事の終つた頃、雪洞の入口は完全に埋まつて、ローソクの火が次第に暗くなり窒息の危険がせまつて来る。幾度も幾度も入口のラッセルは続き、夜は深くなつて行く。外では吹雪がうなり狂つている。

翌朝になつても吹雪は止まない。風はゴウゴウとツェルトを打ち、雪洞内に飛



成功に喜ぶ嶺走隊(白馬岳)

雪が舞う。シュラフもマットも氷が張つている。サポート三隊はもうキレットに來ているだろう。距離にして一杆足らずだ。夕方も野菜もないカレーを食う。

### 八峰のキレット

四月四日

晴れた。遂に晴れた。瞬く間に出発準備が出来上り、苦しい雪洞に別れを告げて鹿島槍を下る。劔岳が大きく西の空を埋めている。ぐんぐん高度は下がる。カクネ里は総て圧倒的な壁となつて切れ込み、氷の屏風を張つた様だ。勝手の知つた下りをキレットのトラバースに來る。柳川がぐんぐん雪の壁を切つてキレットに入る。オーバーハングの岩が黒く、不気味に僕達にせまる。コルに着いた。

サポーター隊の來た形跡は？  
ザイルは——。  
無い。ただ僕達は自信満々、八峰のキレットはサポーターの無い方が面白い。ザイルを置いてコルに上り、柳川に三ツ道具を受け取るとおもむるに氷の壁に突進する。ステップを刻んで手をかける。パイルでホールドを掘る。足下にはカクネ里が拡がり右手は急峻なルンゼが黒部に落ちてゐる。だが少しも恐怖感はない。ホールドを数ヶ所氷に刻んでぐつと伸びる。ハーケンにカラピナがかかる。柳川にツークを頼んで僕は岩に移る。ハング気味で小さなホールドの手が震えている。十糎又十糎と少しずつかせぐ。そして最後の岩の上のし上る。足下十数米の所で柳川が「にやり」とする。第一難関が突破され全員が登つて來る、荷物のやつかいなつり上げ作業も無事終つた。そして今度は絶壁の横断だ。ザイルがのびてカラピナにかかる。ステップが氷の壁に刻まれる。足の下は千五百米の

黒部の谷だ。フィックスザイルが張られると次々と渡つて來る。遂にキレットは突破された。荷を負つた柳川、桑田、菊池がキレット小屋に入つて行くのを上から眺めていると、僕はうれしくてうれしくて涙がこみ上げて來てしようがなかつた。

### ホームグラウンド

——後立山の稜線

キレット小屋での昼食を済ませて出発の用意をしていると、サポート三隊の隅田、北出が飛び込んで來る。ヤッケを深く着ているので、顔は見えないが、嬉しい事は態度ですぐ解る。

握手が交される。槍、船漕の握手とは又少し異つた暖い喜びが感じられる。全員が成功を確信していたが、その実現が目前にある事の喜びなのだ。福山は家事の都合で帰つたとの事。その代り北出が槍隊の任務を済ませて第三隊のサポートをして呉れたのだ。隅田だつて穂高から下つて遠見尾根を登つて來て呉れた。

上り下りの多い岩峰をゆつくりと五竜に向う。ふり返れば鹿島槍がナンダーデヴィの様にそびえて雪煙を空高くなびかせている。勝手を知つた五竜の稜線は、自分の庭を歩いている様に気安い。そして五竜の頂からは、目的の峯、白馬が、夕陽を受けて紅く輝やいてゐる。もうさ

えざるものは何一つ無い。

胸をおどらせながら僕は白岳小屋に駆け込んだ。キレットから四時間だ。

サポート第三隊の「縦走隊歓迎パーティ」が開かれる。

雪洞暮しと違つて思い切り動いても雪が付かない。それに夕食は「すきやき」だ。どの入口まで詰め込むと僕は少し気持が落ちついて来た。今日は良く歩いたし、良く活躍した。満ちたりの思いで久しぶりにゆつくり手足を伸ばして小屋の夜を楽しむ。

四月五日

空は晴れているが怪晴だ。劔岳の方に怪しい雲が動いている。悪天になる前ぶれの強風が劔の雲を運んで来る。

## 固い団結

サポート第三隊の暖い友情で元氣を取り戻した僕は、今日の予定地天狗の池を目指して出発する。サポートの全員が縦走隊の荷を負つて呉れたので、僕はとても呑気にカメラを振り廻しながら歩いている。槍ヶ岳、ここ遠見尾根、と二つのサポートの重大な任務を務めた北出は黙々と何も無かつた様に歩いている。

僕は北出にこう話しかけた。  
「北出、白馬へ縦走しようや、君はもう任務の大半を終えたやないか。」

「うん、けどな、遠見の撤収をせんと俺の任務は済まんからな。」

縦走隊の成功を自分達の勝利として本当に理解して呉れるこの友は、僕達には無くてはならぬ人間だ。思はず目頭が熱くなる。

唐松小屋にはサポート隊によつて運ばれた僕達の食料、燃料が沢山置いてある。荷を負つて来て呉れた権谷、石神が



雪煙上げる絶高岳連峯

天気の不ぞれない内に、と白岳へ引き上げて行つた。

隅田、北出はザイルを持つて不帰の嶮へ工作に出かけた。その後を追つて僕は出発だ。

不帰の嶮二峯から旧道に入るがやはり悪い。

「ギギキッ。」とアイゼンの岩をかく音が気味悪くルンゼに響く。空は曇つて来た。先を歩いている不帰のサポート隊が白岳に引き返す時間の余裕があるだろうか？

二峯のコルから黒部のルンゼに入り、トラバースに移る。サポートの勇敢な活躍によつて僕は重い荷を負つていても至極安全に歩く事が出来る。トラバースを終ると二峯二峯間のコルに出る。北出の確保で僕は安全に通過する。そして今度こそ前途にさえぎるものは何もない不帰のコルで別れの固い握手が交わされ、やがてお互いは岩峯にかくれて見えなくなつた。

天狗の大登りを登ると劔岳はガスに包まれて遂に嵐は爆発した。

体がふわりと浮き、信州側の崖にたき落されそうになる。這つているのか歩いているのか解らない。爪の丸くなつたアイゼンはツルツルと滑る。ピッケルも先が丸くなつて役に立たない。僕は羽根の無くなつた鳥の様に「よたよた」と進んで行く。天狗の池はもう目の前だ。

## 風、風、風

ここは天狗の池。雪洞作業があるが風で全然顔を上げる事も息をする事も出来ない。

「ゴッー」と風が吹いて小石、氷、ザ

ラメ雪がバリバリと音を立ててヤッケを攻撃して来る。両手で顔をおさえて数分は息をとめる。手袋の中にも、顔も、首も、氷がアツという間に張りついて真白だ。手をのけると又飛雪の来襲だ。顔は徹底的にためつけられる。

絶望的な時間が遅々として流れて行く。

ヤッケの胸には、太いローソクのようなツララが幾本も出来ている。風で堅くしまつた四月の雪は、スコップをはね返して雪洞は未だ少ししか掘れていない。スコップ、手、足、腰、尻、あらゆるものを動かして最大限の努力で雪洞の雪をかき出す。誰の顔も凍つて真白だ。作業は遅々として進まず、時間は刻々と流れる。四時間の決死の奮闘で今まで掘つたどの雪洞よりも小さな御殿は出来上る。ころがり込む様にして中へ飛び込む。

悪い時には重なるものかスベア（ガツリンコンロ）の調子が狂つて、火が付かない。雪だるまの様な姿でスベアの修繕をしている桑田は見るからにあわれた。

もう八時になつた。夕食は全然出来なない。雪洞の入口は雪で埋まり、酸素不足でローソクが消えた。息ぐるしく、皆大きく胸を被打たせている。入口の雪を中にかき込んで穴をあけ、外に這い出す。風でアツという間に池にたたき込まれる。スコップを握つて一生懸命入口を掘る。風は益々ひどくなつて、幾度も幾度

も僕は雪の斜面にたたき付けられる。だが入口を掘らねば窟息だ。風と雪との格闘はいつまでも続く。やつと入口は掘り出され窟息と風、雪の拷問から解放される。

スベアが頼りない音で、小さな焔を出している。めしはおろか、まだ水も出ていない。食べるまでにはもう三時間も待たねばならない。外では吹雪が益々荒れ狂つて来た。

そして苦しみの夜は深まつて行く。

## 昭和三十一年四月六日

悪夢の様な一夜が明ければ空は一片の雲も無い快晴だ。昨日僕達を絶望的なまでに悩ました風は嘘の様におさまり、この天狗の池は春の息吹に満ちている。

天狗の池を後に、今日はいよいよ縦走最後の白馬岳に着ける喜びを胸に秘め、足どりも軽やかに白馬鍾に登る。黒部側の風は冷く頬が痛い、それも少しも苦にならず、反対に楽しくさえ感じる。

天は僕達に祝福して呉れた。青い空にぐつと白馬岳が鋭く、目前に迫つて来た。信州側は雪が多く冬景色だが、黒部側は風で雪が飛ばされて、春の来た事を告げている。

村営小屋を過ぎて、頂上への登りは相当のスピードで歩いているが不思議に少しもつらくない。一生懸命歩いた事、つかつたラッセル、苦しい登り、風、サ

ポートに逢つた喜び、色々な思い出が脳裡を去来する。

ゴールの白馬岳が一歩一歩近づいて来る。全く夢の様だ。丸一年間、一切を忘れて計画に没頭したが、その成果がもう数分の内に実現するのだ。

## 遂に白馬岳頂上に立つ

四月六日午前十一時丁度だ。

荷を置いて遙か彼方、穂高山塊を見つる。青黒く、どつしりと遠くの方にかすんで、過ぎた山波が幾重にも重なつてい

る。柳川がこらえ切れなくなつてザックに身を伏せた。

菊池も、桑田も――。

僕も嬉しくて嬉しくて涙がこみ上げて来てしようがなかつた。

思へば悪天候と戦いながらも良くここまで来たものだ。縦走隊も歩いた。と同時にサポート隊の献身的な努力も高く評価されるべきだ。僕は全部員とこの喜びを分かちたい。チームワークがこの縦走を成功させたのだ。うれしくてじつとしておられず、小踊りをしている。各サポート隊のメンバーの嬉しそうな顔が目に見えて来る。

紫紺の山岳部々旗がとり出されて、田淵先輩の賜物、シモンのピッケルに取りつけられると、折からの風にハタハタとはためく。

四人は穂高の方を向いて関西大学学歌を声高らかに歌う。

「自然の秀麗、人の親和、たぐいなき此の学園。」

紫紺の征旗はちぎればかりに打ち振られる。歌声は空高く上り、清く美しい北アルプスの雪にすい込まれて行つた。

唯一人の事故者も出すことなく見事大目標に到達し得たことは若き日の感激であり、また旺盛なる実践力の記念塔でもある。

コンビーフ、ミカン罐、菓子、沢山の食料が取り出される。僕は少しを今度の山旅を無事に過せた事に対する神への感謝のしるしとして、頂上に雪を掘つて埋めた。

すべてが新らしく感動的だ。誰の顔も笑顔で埋め尽されている。

十二時白馬頂上に別れを告げた。目的を果した喜びに足どりは軽い。梅池に下りながら涙が出てしようがなかつた。

「達成された理想はもはや理想ではない。人生には他のアンナプルナがある。」とモリス・エルゾークはいった。

僕達の小さな理想は北アルプスの縦走だった。汚れを知らぬ北アルプスの大自然の舞台で思う存分、手足をのばして青春時代を楽しめた僕達は幸福だ。

僕達はこの縦走を通じて、この奥底にあるものを学び取り、それを土台にして

より高きを求めるのだ。

関西大学の前途に幸多かれ、そして関西大学の山男に限りなき幸あれ。

## 梅池の朝

梅池の小屋は摂氏十八度で、零下十八度の山から降りて来た僕達にとっては熱くて熱くて仕方がない。それなのに新はどんだん「ストーブ」に投げ込まれて快適？な温度に調節される。

春夜のフィルムクラストした乗鞍岳の斜面に、細い三日月が反射して、にぶく螢光灯の様に輝やいていた。今朝の梅池は何というのどかさであるう。白樺の林のはずれで「ひばり」が鳴き、朝起きのスキー客は早やくもスキーの手入れに余念が無い。

空は青く晴れて、なだらかな起伏の梅池の斜面は朝の太陽に反射してきらきらと光っている。木立の中を思い思いのスキーのシュプールが入り乱れてそのどかさを物語っている。僕は歩きながら考えていた。

やりとげた事、北アルプスの積雪期全山逆縦走は最早過去の事になった。

僕達の次の目標は、その目標はこのアバンチュールが物語っている事自体だ。

(法四・山岳部員)

# 学内報

## 臨時評議員会

学校法人関西大学寄附行為第十八条第三項により臨時評議員会を、九月二十七日(金)午後五時より天六学舎において開催し、工学部設置承認に関する件並びに昭和三十二年度学校法人関西大学収支追加予算承認に関する件等を審議、これを承認した。

出席者(敬称略、五十音順)

明石三郎 阿部甚吉 池田信之助 岩崎卯一 浦野健二郎 越智比古市 大島武夫 榎本信雄 勝島芳松 桂忠雄 神宅賀壽恵 川口勇 河村宜介 小寺小市郎 小林巖 佐伯五郎 白川朋吉 関豊馬 竹沢喜代治 竹下百馬 寺西武中 務平吉 中山幸市 長柄金吾 浪江源治 西村治三郎 西本寛一 春原源太郎 東浦栄一 久井忠雄 久松鹿治 平井三朗 福島四郎 藤野春三 本多喜慶 松原藤由 松村睦鴻 水谷揆一 宮崎平 三好万次 村尾静明 村上精三 森川太郎 矢口孝次郎 保井剛一 矢野文雄 横田健一 吉田一郎 吉田鹿之助 吉富二郎

## 定例評議員会

学校法人関西大学寄附行為第十八条第二項により定例評議員会を、十月十七日(木)午後一時半より、時恰も落成式を終えたばかりの千里山第三学舎第一会議室において開催、一般報告事項などにつき

業務報告が行われた。

## 四学部長改選

四学部長の改選は、九月四学部教授会においてそれぞれ選出され、十月一日付にて理事会で任命された。

法学部長 中谷 敬寿教授  
経済学部長 中川庸太郎教授  
文学部長 壺井 義正教授  
商学部長 安田 信一教授

なお学部長代理には、桜田誉(法) 高木秀玄(経、藤本是文) 山崎紀男(商) 各教授がそれぞれ選ばれた。

なおまた、今般新たに一般教育管理委員会が設けられたので、その部長及び部長代理も同時に任命された。

教養部長 堀 正人教授  
部長代理には松原藤由教授が選ばれた。

## 新学部長略歴

中谷敬壽法学部長  
京大法卒、本学専任講師、教授(法学部)、法文学部長、法学部長、大学院部長、大学院兼務、法学博士  
中川庸太郎経済学部長  
関大専門部卒、コロンビヤ大卒、本学講師、助教授、教授(経済学部)、経済学部長、同部長、大学院兼務、経済学博士

## 壺井義正文学部長

東大文卒、本学講師、教授(文学部)、文学部長代理、同部長、大学院兼務  
安田信一商学部長  
関大経商卒、本学助教授、教授(商学部) 商学部長代理、大学院兼務、補導主事

## 堀 正人教養部長

京大文卒、本大学教授、法文学部長、文学部長、大学院兼務

## 第三学舎竣工

かねてより千里山学舎増築計画の一部として、第二学舎に隣接して東南側の敷地に建築中であつた第三学舎はこの程竣工十月十七日(木)午前十一時より、文部大臣松永東氏をはじめ、学界及び各方面の名士を迎え、大学にふさわしい雰囲気をおもて、盛大に落成式を挙行政した。

なお、第三学舎は昭和三十一年三月十五日施工以来一カ年有餘を費して完成したが、本建物の特色としては研究室六階建三十八の個室と図書館分室とを附置し、研究と教育とを緊密に接触させる場を形成し、さらに、合併教室を扇形にして、その音響効果を最高度に發揮できるとか、なおまた、廊下は開放様式として彩光を良くし騒音を逸散させて、近代構築美を千里山学園の景観美と調和させるよう設計されている。

なお、定礎には「以文会友以輔仁」(論語顔淵篇)と刻まれている。

## 三木教授渡仏

文学部三木治教授は昭和三十二年度在外視察研究員として、フランス中世喜劇の研究のため、十月二十日「はと」号で大阪発、同二十二日羽田空港よりエール・フランス機でフランスへ向つた。

なお、同教授はパリ大学を主にフランス諸大学に学び、後、イギリス、イタリヤの著名大学を訪問する予定。

## 故武田宣英氏を悼む

本学顧問武田宣英氏は十月十一日逝去せられ、八十八才の生涯を閉じられた。氏は明治三年生れ、十七才の時郷里の高知県を後に上阪し、本学創立者の一人井上操氏の門下生となり、関西法律学校(本学の前身)の創設と同時に入学し、明治二十二年その第一回生として卒業した。氏こそは本学創立当時の状況を経験せる唯一人の生存者であつた。

その後上京して和仏法律学校(法政大学の前身)に入学、明治二十五年最優秀の成績で卒業し、翌年辨護士試験に及第者四十名中十位で合格、爾後五十年東京で辨護士を開業しておられた。

また、氏は日露戦争直後すなわち明治四十年私費でドイツに渡り、ライプツヒ大学で法学を学び、帰朝後その成果を纏めて「日本陪審法論」と題して学位を、本学に請求し、昭和三年法学博士号を授与された。これは本学における学位審査認可以来最初の学位受領であつた。大正九年本学協議員に選ばれ、昭和四年頃から幹事、または理事として大学行政に参画し、役員の仕事に於て六期十八年三カ月に亘つた。

老後は神奈川県湯河原に余生を楽しんでおられた。氏は性来極めて礼義正しく謹厳純誠であつた反面、また温情に厚い人格者ことは、その著「風樹の記」(後「山荘四季の夢」と改題再版)に拘すべき詩藻の豊かさに溢れている。

(文学部横田健一教授の「校友の面影」による)





校友 パツチ

校

友

「横須賀市史」寄贈

渡辺正之助氏の美著

横須賀市庁に勤務の渡辺正之助氏（昭和八年職生）は、横須賀市制五十周年記念にあたり、勤続十年のため受領された「横須賀市史」（横須賀市制五十周年記念出版、一三四頁美装本）を教材の一部にもと本学に寄贈された。

校友会本部の動き

九月

- 三日 総務部会・午後六時、天六一中校長室
- 十一日 財務部会・午後六時、天六理事会議室
- 十五日 西淀川支部設立総会・午後二時 西淀川区役所会議室・岩崎学長、寺西組織副部長出席
- 十六日 日本生命北斗会総会・午後五時三十分、朝日会館「アラスカ」、岩崎学長、門上組織部長出席
- 十八日 常議員会・午後六時天六学舎四十一教室
- 二十日 短期大学同窓会役員会・午後六時、郵政会館
- 二十一日 体育会総会・午後六時、天六学舎体育館

二十四日 組織部会・午後五時三十分、グリル網堂

二十六日 大阪支部幹事会・午後六時、一中校長室

西淀川支部設立総会

西淀川区では九月十五日西淀川区役所三階会議室で支部設立総会を開催、本学から岩崎学長、校友会から寺西組織副部長が出席した。

会は寺北真都男氏の司会で始められ、座長に吉木由雄氏が選出、議事に入り、結成に至る経過報告、会則案の審議決定、役員を選出を行った。役員選出には選衛委員七氏で寸時協議の結果、支部長に弁護士吉木由雄氏以下役員が決定した。

岩崎学長、寺西組織副部長が祝辞と抱負を述べ、祝電の披露後宴に入った。学生の頃の思い出に学歌、道遥歌、豪毅節等合唱、珍芸披露の盛會裡に午後六時閉会した。

当日決定役員  
支部長 吉木由雄  
副支部長 渡辺治明、池田佐太郎  
顧問 橋岡熊四郎、八木万太郎、吉田正之、岡田輝夫、竹内義一  
相談役 今井康夫、岩岸巖、杉田兵作、石鐘正造、淡敷男、川見公直、山田園一、山田耕助、辻井安栄、崎谷三郎、小山修  
幹事 二十三名

日本生命北斗会

日本生命北斗会では九月十六日（月）大阪中之島朝日ビル十階「アラスカ」で総会を開催、本学から岩崎学長、門上組織部長が出席した。

会は岩崎学長が挨拶と外遊所感を述べ始まり、次いで門上組織部長から挨拶と校友会現況報告、将来の抱負を述べた。台風接近で風雨が強い夜だったが、会員は三十余名出席、議事を終つて一同楽しく会食を共にして午後九時学歌斉唱を最後に閉会した。

体育会 総会

体育会では九月二十一日（土）午後六時から関西大学天六学舎体育館で総会を開催。

会は鉄井学生課長の司会で始められ、会長に矢野文雄前会長が満場一致で再選された。

矢野新会長の挨拶のあと全員自己紹介を行い会食をしながらなごやかに議事を進め、来賓岩崎学長、久井専務理事、山田学生部長からそれぞれ挨拶と現況報告、抱負が述べられた。最後に学歌斉唱、万才三唱をもつて午後九時閉会した。

当日出席者

- 来賓 岩崎学長、久井専務理事、山田学生部長
- 会員 矢野文雄、猪飼幸三、沢山勝、後藤幸重、吉川敬一、飛田陽一、北原元茂、津田弘、八十原武之助、渡辺四郎、浅野秀、坪田吾一、松葉徳三郎、野間秀泉、永井政次、岸源左右衛門、有賀司郎、大島鎌吉、松井清、上住平一、尾郷之助、久代俊夫、松本純一、灰瀬隆之、下山章、名剣要一、山脇賢、山村彰、松田誠良、佐伯五郎、菊池清、黒木和彦、小川豊作、鉄井良男、天野泰祐、上田昭三、北川啓裕、井上高、千島不二雄、天野正、樹本哲治、当摩嘉治

記念植樹申込者（その九）

池垣定太郎 楠 一本

計 四本 ヒマラヤ杉 一本  
二百本 ユーカリ樹 十三本  
十四本 メタセコイヤ 十一本

昭和三十三年十月三十日発行

関西大學學報 第三〇八號

大阪府大淀区長柄中通二丁目二番地  
編集兼 久井 忠 雄  
印刷所 株式会社 ナニワ印刷所  
電話(35) 七二七一

発行所 関西大學學報局  
大阪府大淀区長柄中通二丁目  
電話(35) 二〇七二番  
振替大阪 二六七二番

昭和三十一年

校友名簿

在学時代の友を想うよすがに、  
また、卒業後の親睦連絡に、  
この一冊を備えて御利用下さい

— 収載人員二六、〇〇〇余名 —

B5判 六〇〇頁  
実費頒価五〇〇円  
(送料当方負担)

申込先

関西大學校友課  
大阪府大淀区長柄中通二丁目  
振替大阪 二二八七五番

## 記念植樹募集

昨秋創立七十周年を記念して施設の拡充を図り、千里山及び天六両学園に近代建築の学舎を完成し得ましたことは洵に御同慶に堪えません。

さて、この構築美に配するに樹木や芝生の景観美を以てし、造園技術の粋をあつめて、教育環境を形成することは、日々これに接する学生達にあるいは憩いの、あるいは思索の場所を与え、学習研鑽の資となるべく、また、学窓を出でては学舎と共に、一本の樹木にも母校への思慕の情を抱かしめるであります。

かかる教育環境形成の重要性に鑑み、本学では植樹造園につとめたいと存じておりますが、また有志の方々からこの趣旨に御賛同下されて樹木の御寄附にあづかり得ば幸甚に存ずる次第であります。

昭和三十三年三月

關西大學

謹告

此度記念植樹御寄附の内、本学に於て樹木の幹旋をいたしました中で、根着不良の爲め立枯致しました分は樹木の種類に依じて適当なる季節に補償植直し致させます故御了承願います。

昭和三十三年十月十日

關西大學 校友課 課

昭和二十六年十月十五日第三種郵便物認可  
昭和三十三年十月三十日発行(毎月一回三十日発行)

關西大學學報

第三〇八號 十月號

## 關西大學學生募集

昭和33年度

大学院 修士課程 法学・文学・経済学各研究科  
博士課程 法学・文学・経済学各研究科

学部 (第一部=昼間・第二部=夜間)

法学部 法律学科・政治学科  
経済学部 経済学科  
文学部 英文・国文・哲学・仏文・独文・史学・新聞・東洋文学の各学科  
商学部 商学

		一 次 募 集		二 次 募 集		
		願 書 受 付 期 間	試 験 日	願 書 受 付 期 間	試 験 日	
第一部 (昼)	法学部	昭和32年12月2日(月)~ 昭和33年1月10日(金)	1月15日(水)	2月1日(土)~	法商} 3月6日(木)	
	商学部				法商} 3月9日(日)	
	経済学部				経文} 3月7日(金)	
	文学部				経文} 3月10日(月)	
地方試験は、第一部(昼)一次募集のみである			地方試験は行わないから注意されたい			
第二部 (夜)	法学部	法商} 3月6日(木)	法商} 3月9日(日)	3月12日(水)~3月31日(月)	4月1日(火)	
	商学部	昭和33年2月1日(土)~	経文} 3月7日(金)			経文} 3月10日(月)
	経済学部					
	文学部					

地方試験場 高松・福岡・広島・金沢・名古屋・札幌

◎昭和33年度より工学部(第一部)を開設の認可申請中である

入学案内 (要50円 予16円) 關西大學庶務課宛

{大阪府吹田市千里山  
大阪市大淀区長柄中通二